

すべての人がバリアを感じない制服

熊本県立熊本北高等学校
URII 生活科学班

目的
障害を持っている人やジェンダーで悩んでいる人もみんながバリアを感じない制服を提案する。

結論

①ポンチョ型の制服

1 はじめに

現在、日本でLGBTqに対する取り組みが増えているとともに、公共施設ではバリアフリーの考えに基づいた工夫がなされている。そこで私達は普段着ている制服に着目した。制服はほとんどの高校で着用されている。しかし、その中で性別で困っている人や身体に障害を持っていて制服を着用するのが不便な人がいると考えた。

2 実験方法

<過程 I> 制服の論文

(1)インターネット等で制服についての論文を読んで制服の定義や効果などを調べる。
制服の定義として統一感をだすため、学生らしさを表すもの

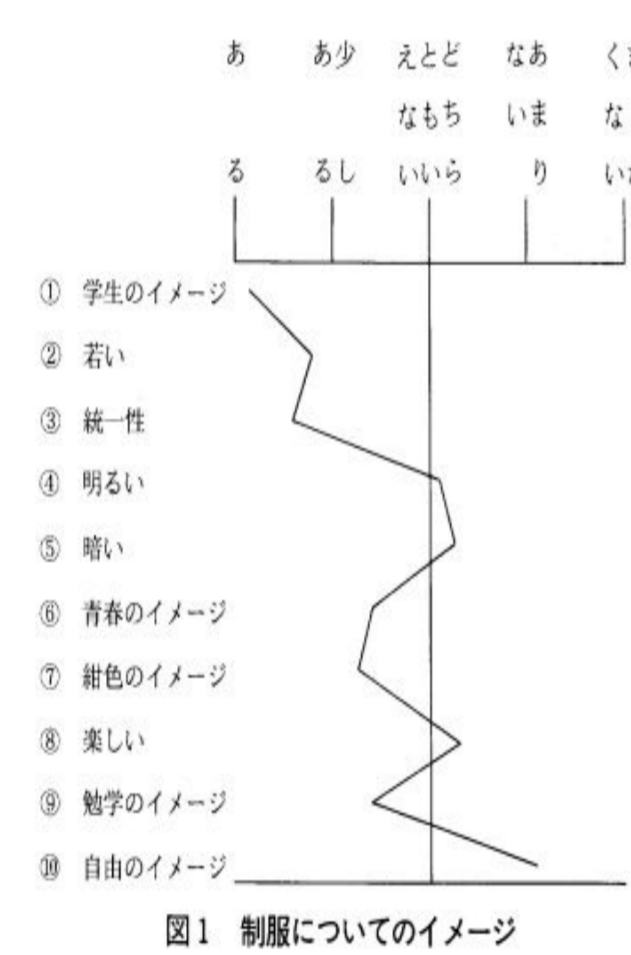


図1は制服のイメージの評定平均値を求め、プロフィールを描いたものである。制服のイメージとして強いのは学生らしさ、統一性、若さなどである。また青春や、紺色、勉学のイメージもあるといえる。イメージとしてあまりないのは、自由、明るい、それと暗いという対比したイメージが、ほぼ同じ程度で捉えられているのは、矛盾しているように思われる。これは制服が学校生活をイメージさせ、学生生活の両面性を表していると考えられる。

高校生の制服に対する意識と学校教育との関連について

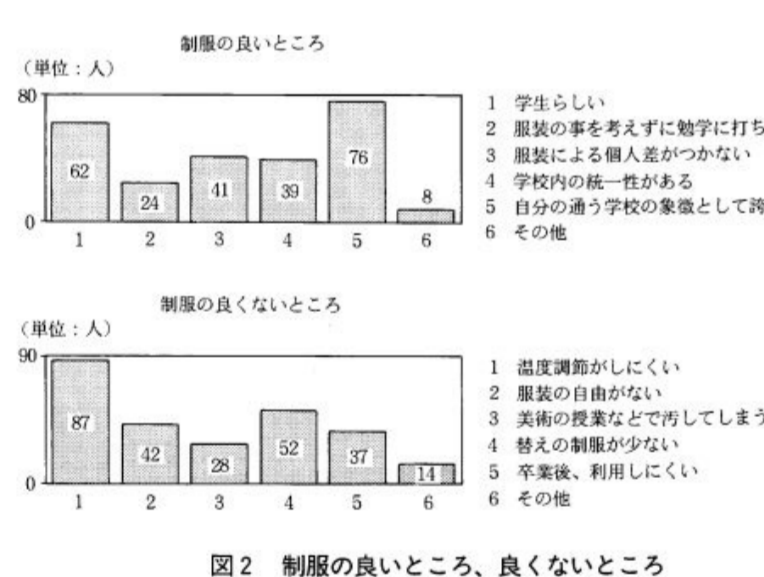


図2では、制服のいいところとして自分の通う学校の象徴として誇りが持てるが76人と一番多く、調査対象となった生徒は半数近くが自分の学校に誇りを持っている。次に、学生らしいが62人と多く、制服を着用すると学生らしく見えるということが、生徒から見て良いことだと受け止めていることがわかる。
また制服の良くないところは、温度調整がしにくい87人、変えの制服が少ない52人と多く、衣服本来の機能性や現実的な理由が多い。生徒が不満に感じているだろうと思われた服装の自由がないというのは、2番目に多い42人であった。

<過程 II> ポンチョ型制服の提案

- (1)障がい者、けが人も着やすいような制服
- (2)多様な時代に合わせた制服
- (3)今までにない新しい制服

3 研究結果

<過程 I>

図1より学生が思う制服のイメージが統一性と学生らしさ、青春、勉学であり学校の定義にあった見方をしていると感じた。
図2より温度調節しにくいという意見が強くそれを改善できれば良いなと感じた。

<過程 II>

- (1)障がい者、けが人も着やすいようにするためにポンチョ型の制服にした。シャツは片側フルオープンでスナップボタンを使用しているので着脱しやすく、感覚過敏の人のために素材は綿100%である。ポンチョとスカート・ズボンの色は色盲の人でも見え方に差が少ない紺色を採用した。
- (2)男女関係なく着ることができるように、リボンとネクタイをなくし、自分でスカートかズボンを選べるようにした。そして、ポンチョは男女ともに着れるためにデザインした。
- (3)ポンチョ型制服は今までにない新しい形である。

4 考察

今後は、現在のような男女で分かれている制服よりも多様な人に対応した制服や自らが選択できる制服が重要視されていくと考えられる。

5 今後の課題

アンケートの実施とともにデザイン案の改良を行いたいと考える。アンケートをもとに目的である障害やジェンダーで悩んでいる人が制服を楽しく着れるような制服を制作する。

6 参考文献

・高校生の制服に対する意識と学校教育との関連性について/福村愛美

<https://core.ac.uk/download/pdf/228914822.pdf>

